Q22 なぜ辺野古埋立てを巡る県民投票が行われたのですか。また、その結果はどうだったのですか。

A 沖縄では、平成25年（2013年）の辺野古埋立承認以降、平成26年（2014年）と平成30年（2018年）に行われた２度の知事選挙や、衆参議員選挙など一連の選挙でも、辺野古反対を掲げる候補者が当選していましたが、政府は、「選挙は様々な施策で各候補の主張が行われた結果である」として、工事を強行していました。

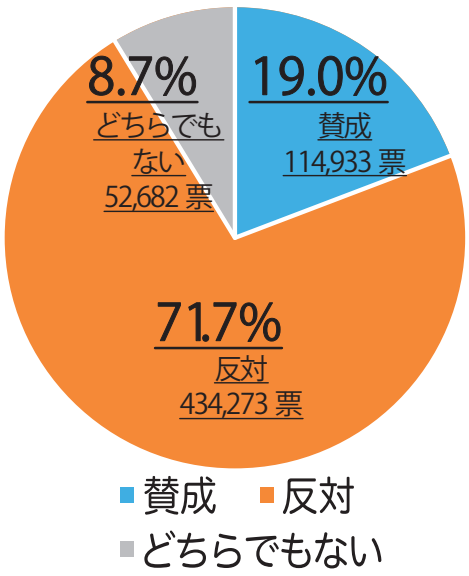
そのため、県民の中から、純粋な民意を示すには、一つの争点に絞って、住民の意思を問うべきであるとの声が上がり、平成30年（2018年）５月から７月にかけて行われた署名活動により約93,000筆の署名が集まり、地方自治法に基づく直接請求を受けて県条例が同年10月に制定され、平成31年（2019年）２月24日に普天間飛行場の代替施設としての辺野古埋立ての賛否を問う県民投票が実施されました。

その結果、投票率は52.5％となり、投票総数の71.7％、43万4,273人の圧倒的多数の方が辺野古埋立てに反対の意思を示しました。辺野古埋立てに絞った民意が初めて明確に示されたことは大変重要な意義があります。

沖縄県は日米両政府にこの結果を通知するとともに、辺野古移設断念と対話による解決を求めましたが、日米両政府ともに「辺野古が唯一の解決策」との姿勢を変えず、県民投票により直接示された県民の思いを一顧だにせず工事を強行し続けています。

沖縄県としては、日米両政府は、これまで明確に示されてきた辺野古移設に反対の民意に真摯に向き合い、工事を中止して対話に応じるべきであると考えています。

■辺野古米軍基地建設のための埋立ての賛否を問う県民投票



※上の図は無効投票の数(0.6%、3,497票)を省略して作成したものです。

県民投票前日　平成31年（2019年）２月23日

県民投票結果の安倍総理への手交
平成31年（2019年)3月1日

Q23 辺野古・大浦湾の自然環境は貴重なものなのでしょうか。

A 沖縄には、世界的にも貴重な亜熱帯島嶼（とうしょ）域の豊かな海と森があり、これらは私たちの誇るべき財産です。

その中でも、辺野古・大浦湾は、特異な地形的特徴を反映し、多様な生態系が狭い水域に組み合わさる、生物多様性が極めて高い海域です。

沖縄防衛局による環境保全図書において、この海域では絶滅危惧種 262 種を含む 5,300 種以上の生物が記録されています。

この海域の自然環境の重要性は、日本生態学会をはじめとした 19 もの学会の共同声明でも指摘されています。
環境省は、この海域を「生物多様性の観点から重要度の高い海域」として選定し、ラムサール条約湿地の国際基準を満たす潜在候補地としています。

世界的な海洋学者であるシルヴィア・アール博士が率いる米国の環境 NGO ミッション・ブルーにより、辺野古・大浦湾の沿岸域一帯が希少なアオサンゴ群落やジュゴンを含む数千種の生物が生息する重要な生物多様性を持つと評価され、また、一度壊せば取り戻せない生態系と辺野古新基地建設のどちらが大事なのかと疑問の声を上げることが重要であるとして、令和元年（2019 年）10 月に「ホープスポット※１」として登録されました。

また、沖縄は現在日本で確認されている唯一のジュゴンの生息地で、世界のジュゴンの北限の生息地となっております。ジュゴンは国の天然記念物に指定されている絶滅危惧種ですが、辺野古・大浦湾は、ジュゴンの餌場である海草藻場が沖縄島周辺で最大の規模で広がる、ジュゴンの生存にとって非常に大切な場所です。

私たちは、この海域が育む命と自然がかけがえのないことを知り、この美しい海を守り、子孫へ引き継ぎたいと切に願っています。

キーワード

●ホープスポット※1

ホープスポットとは、世界的な海洋学者シルヴィア・アール博士が立ち上げた米国のＮＧＯミッション・ブルーが行っている、世界的に重要な海を登録し、海洋保護の網をかける活動のことです。
ホープスポットは、14名の海洋学者からなるホープスポット協議会において、世界に誇ることができる十分な科学的価値、文化的・歴史的・精神的価値、人間活動による影響をくつがえすことができる可能性のある海域、これから一緒に守っていこうとする地域のサポートがあると認められた場所が登録されます。

【QRコード】

辺野古・大浦湾の自然環境については、こちらのページもご覧ください。